

# 「語り部」生成の民俗誌にむけて

——「語り部」の死と誕生、そして継承<sup>1</sup>

Toward an Ethnography of “Kataribe” Generation:  
Birth, Death, and Succession of “Kataribe”

川松 あかり

KAWAMATSU, Akari

## はじめに。本論の問い

本論は、現代の日本社会においてますます存在感を高めている「語り部」<sup>2</sup>について民俗学の立場から考察を試みるものである。

2018年3月24日の毎日新聞宮城県地方版は、「東日本大震災の風化を背景に、教訓を伝える語り部団体の多くが存続を危ぶんでいる」と、東日本大震災から7年を経て、語り部が消滅の危機に直面していることを伝えている<sup>3</sup>。一方、2018年3月1日の朝日新聞岩手県地方版の記事では、「大勢の前で語り部を務めるのはこの日が初めてだ」と、今年1月に初めて「防災」の語り部として活動を始めた22歳の若者を紹介する<sup>4</sup>。

こうした語り部をめぐる日々発信される情報に触れているうちに、一つの疑問が湧いてくる。今、本当に語り部は消滅の危機に瀕しているのだろうか。現代社会は、語り部が失われていく過程にある社会なのだろうか、それとも語り部を生み出す社会なのだろうか。もし、上に紹介したように、語り部の存続が危ぶまれる一方で新しい語り部も生まれているのだすれば、どのような語り部が消えつつあり、どのような語り部は増加しているのか、そして、両者はどのような関係にあるのだろうか。

ここ数十年来、「記憶」をめぐる諸問題は学際的に、そして社会的にも注目を集め続けてきた。特に最近では、記憶を継承することへの関心が高まっている。『過去を忘れない：語り継ぐ経験の社会学』<sup>5</sup>は、主に社会学の立場からライフストーリー研究を行ってきた編者たちがその問題意識を深め、世代をまたいで「語り継ぐ」ということに主眼を移している。歴史学の立場からは、沖縄での戦争体験を「非体験者であるわたしたち」がいかに継承することができるかが模索されている<sup>6</sup>。この際にしばしば議論の俎上に載せられるのが、現代社会において語り部と呼ばれる人びとである<sup>7</sup>。

ところで、上述の論集の序において、ライフストーリー研究を牽引してきた社会学者の桜井厚は「語り継ぐといえど、すぐに民俗学が主要な資料としている『伝承』が思い浮かぶ」<sup>8</sup>、と述べている。たしかに、世代を超えて脈々と受け継がれるものとその継承の行為

1 謝辞：本研究は日本学術振興会科学研究費補助金による特別研究員奨励費、課題番号“15J07759”「地域語りの現在と歴史経験——旧炭鉱地域における『語り部』生成の民俗学」として助成を受けたものです。ここに謝意を表します。

2 「かたりべ」、「カタリベ」、「語り部」など様々な表記が存在するが、本論では一般的な用語として用いる際には「語り部」の表記を用いる。実際に存在する個別の「語り部」について取り上げる際は、それぞれの表記方法にしたがう。

3 「東日本大震災7年：語り部団体 存続模索『将来の命守る』思い共有／宮城」毎日新聞宮城県地方版、2018年3月24日。

4 「〔3・11その時、そして：2449〕大森由樹さん：1 語る、私は『防災ガール』／岩手県」朝日新聞岩手県地方版、2018年3月1日。

5 桜井厚・山田富秋・藤井泰編 2008『過去を忘れない：語り継ぐ経験の社会学』せりか書房。

6 屋嘉比取 2008『戦後世代が沖縄戦の当事者となる試み：沖縄戦地域史研究の変遷、『集団自決』、『強制的集団自殺』』『沖縄・問いを立てる：4：友軍とガマ 沖縄戦の記憶』屋嘉比取編、社会評論社、19-73頁。

7 例えば、高山真 2008「原爆の記憶を継承する：長崎における『語り部』運動から」桜井他編、

前掲書、35-50頁、桜井厚2015「語り継がれる物語の社会的文脈：戦争体験を語り継ぐ沖縄の実践から」『歴史と向きあう社会学：資料・表象・経験』野上元・小林多寿子編、ミネルヴァ書房、227-248頁。

8 桜井厚2008「序 語り継ぐとは」桜井他編、前掲書、7頁。

9 桜井は先の引用部分に続けて、嫁盗みという婚姻習俗についての民俗学的知見とライフストーリー研究者である自身の解釈の違いを述べたうえで、民俗学は伝承を「継承している過去の制度的な習俗や慣行内容」として捉える学問であるという前提のもとに、「伝承」をそのように捉えるよりも「未来へ語り継ぐ『言語行為』」とらえることで、その語りの変異も理解できるのである」と、語り継ぐ行為を捉える研究としてライフストーリー研究を価値づけている（桜井、同上、7-9頁）。しかし、『日本民俗大辞典』では、伝承とは「上位の世代が語る言葉、または上位の世代が示す動作・所作を、下位の世代が聴くか見ることを受け継いでいく行為のこと」[平山和彦2000「伝承」『日本民俗大辞典 下』福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄編、吉川弘文館、164頁]とされており、実は、民俗学でも「伝承」は桜井のいう「言語行為」も含みこんだ概念として捉えられていることがわかる。むしろ、本論にとって重要なのは、社会学者としてライフストーリー研究を行ってきた桜井が経験の継承を意識した時に、「伝承」という民俗学にとって古典的な用語を持ち出したという事実である。

10 日本大辞典刊行会1973『日本国語大辞典』第1版第4巻、小学館、664頁。

11 柳田國男1962「妹の力」『定本柳田國男集』第9巻、筑摩書房、207-218頁。なお、以下『定本柳田國男集』からの引用に際し

とは、まさに民俗学が研究対象としてきた「伝承」の領域である<sup>9</sup>。そもそも「語り部」という用語自体が、なんとなく“民俗学らしい”感じを漂わせてはいないだろうか。しかし、意外にも民俗学はこれまで、現代社会でこれほどにも重要性を増している語り部の問題を扱う視点を築いてこなかった。そこで本論では、「語り部」と呼ばれたり、「語り部」であることを自認したりする人びとが、現代社会の中でどのようにクローズアップされてきたのかを明らかにすることを通して、語り部をめぐる問題に民俗学こそが貢献すべき重要な領域が拓いていることを示すこととする。

## 1. 柳田國男のとらえた語り部

実際、民俗学の創始者である柳田國男は語り部を論じている。しかも、柳田の説において歴史上語り部が果たしてきた役割とは、かなり重要なものである。

そもそも、語り部とは「上代、文字のなかった時代に語り伝えられてきた史実、伝説等を保存し、語り伝えることを職とした者」<sup>10</sup>であった。柳田は「妹の力」において、『古事記』を語ったとされる稗田阿礼もその一族に含まれると考えられる語り部、猿女君氏<sup>さるめのきみ</sup>について論じている<sup>11</sup>。猿女君氏は代々女性に相続が行われる一族で、朝廷に仕えて御魂鎮めの祭りに奉仕した、語りを司る部民であった。これが近隣の有力氏族と婚姻関係を結んで全国に四散したために、全国に語り部の保存してきた神話が伝わったというのが、ここでの柳田の推論である。柳田は、日本各地に似通った物語が伝わる不思議を、代々旅をしながら各地に物語を伝えて歩いた語り集団の存在を認めることで解きほぐそうとした。さらに、後に柳田は、「語り部という部曲は、久しからずして朝家の制度の表面からは消えたが、其頃からは衣食の種にする者が、地方に分散して愈々其数を増加したやうである」<sup>12</sup>と言い、朝廷の制度の中での職分が失われて四散した語り部たちと共に現れ、全国を旅して語りを生活の糧とした職業集団と、朝廷に仕えた上代の語り部をまとめて、「語り部」と呼ぶ。神話を司る語り部たちの零落と共に、神話もまた旅の語り部たちによる芸術的改変によって、昔話、そして後には聴衆を楽しませる笑い話へと零落したというのが、柳田の口承文芸をめぐる説の一つの肝であった<sup>13</sup>。

また柳田は、古代の語り部は巫女の一族であったのであり、神に憑かれて「神々に身と口とを貸して、人に歴史を語り伝えるのが此家の職掌であつた」とも主張している<sup>14</sup>。語り部が語っていると言っても、実際には語り部にとり憑いた神が自分自身の歴史を語ったというのだ。しかも柳田は、この神がかりによる一人称の語りの様式は、神話が

人びとから信じられなくなり、専ら文芸的なものとして聴衆の関心を集めるようになっても変わらなかった例が多いという<sup>15</sup>。語部の語りの一人称という様式こそが、語部という職掌がなくなり神話への信仰が失われていった後も、その語りを聞く者に感動を与えた理由であったというのだ<sup>16</sup>。このような柳田の論じた語部の特徴は、現代の語り部を理解する上でも重要であると考えられる。

## 2. 語り手論としての民俗学

しかし、柳田以降の民俗学においては、語りはあくまで手段であり日本民俗学はこれを通して行為を把握する学問である<sup>17</sup>という福田アジオの主張からもわかる通り、語る人そのものにはあまり関心が払われてこなかった<sup>18</sup>。しかし、その反省から今、民俗学は“語る人”をとらえる学問へ向かおうとしているとも言えそうだ。本章では、語り部の民俗学へと行きつく過程として、社会の中で“語る人”をとらえる「語り手論」としての民俗学の歴史を概観する。

民俗学において語り手論を昔話研究の重要課題として位置づけようとして議論を積み重ねてきたのが、野村純一である<sup>19</sup>。野村は「昔話の研究(上)：その問題点について」(1969)において、これまで昔話の採集とその分類・整理を主眼に進められてきた昔話研究を、以下のように批判した。

たしかに昔話はある。そして、昔話だけがある。昔話集がこうした形態をとった場合、そこには当然、人間不在、語り手の不在はいうまでもなかった。話を伝えてきた独自の条件はもとより、民俗そのものとも切り放たれ、切り離されているのであった。昔話が存在しているのにもかかわらず、それを圍繞し、それを支えてきたはずの伝承基盤は、久しくないがしろにされていたのである<sup>20</sup>。

しかし、こうして語り手に注目した野村が見出したのは、上の引用部にも端的に表れている通り、人としての語り手そのものというよりは、語り手を通して見えてくる民俗や伝承基盤なるものであった。

一方で、野村たち語り手論の論者たちは、語る個人と集団の関係の捉え方をめぐる普遍的な問いも提出していた<sup>21</sup>。昔話研究懇談会が1979年に行ったシンポジウム「昔話の語り手」では、昔話を文学として捉えるか民俗として捉えるかをめぐって議論が交わされた<sup>22</sup>。ここで、会場の発言者であった福田晃は、「口承文芸も民俗慣行であると同時に、創造的な営みだということをもっては悪いの

では、旧字体の漢字は新字体に直した。

12 柳田國男1963「国語の将来」『定本柳田國男集』第19巻、筑摩書房、70頁。

13 柳田國男1962「東北文学の研究」『定本柳田國男集』第7巻、筑摩書房、374-376頁、柳田國男1963「島原半島民話集」『定本柳田國男集』第6巻、筑摩書房、478頁。

14 柳田國男1962「東北文学の研究」前掲書、374-375頁。

15 柳田、同上。

16 柳田は前掲の「東北文学の研究」[375頁]において、アイヌの動物説話や東北地方の盲目の巫女の歌物語も、神や霊が憑りついた「一人称の自伝」として語られていたのだと説き、「現に目前に在つて語る者が、凡庸なる我仲間の一に過ぎぬことを知りつゝも、別に背後に隠れて彼をして言はしむる力あるを信ずる故に、興味と感動とは常に新たであり、或ひは信仰の変化した後に至るまで、なほ其様式に対する愛慕の情を断つことを得ないのであつた」と述べている。

17 福田アジオ2016「歴史と日本民俗学：課題と方法」、吉川弘文館、206-207頁。

18 近年、再帰的に自分自身について語る〈人〉を民俗学的な研究課題として論じてきた門田岳久は、このような状況を「他者と面と向かいその人自身の経験や記憶に耳を傾けながらも、聞き手の関心は目の前の人ではなく、村や集団が共有している集合表象としての『民俗』にあつた」と批判している。門田岳久2014「民俗から人間へ」『〈人〉に向きあう民俗学』門田岳久・室井康成編、森話社、19頁。

19 川森博司2000『日本昔話の構造と語り手』、大阪大学出版会、

165頁。

20 野村純一1969「昔話の研究(上):その問題点について」『日本民俗学会報』(59)、3頁。こうした昔話の語り手論をはじめとする野村の昔話研究は野村純一1984「昔話伝承の研究」同朋舎出版、にまとめられた。

21 語り手論が民俗学において個人を問題にした分野であったことは、小池淳一1989「言語・伝承・歴史:日本民俗学における個人認識」『族』10、20-31頁、が早くから論じている。

22 立石憲利・野村純一・飯豊道男・武田正1980「シンポジウム 昔話の語り手」『昔話の語り手:昔話一研究と資料一』第9号、三弥井書店、69-121頁。

23 立石他、同上、108頁。

24 立石他、同上、109-110頁。

25 この発言は、社会学者の佐藤健二がライフヒストリー研究について論じる中で主張する「フィールドとしての個人」という視点を想起させる。佐藤は、人間を「関係的な存在である」としながらも、「その関係を『社会』とか『全体』とか『規範=秩序』などという、抽象的なことばに回収してしまう『社会学的な認識』」を避け、様々な「関係が複雑に集積する〈場〉」としての個人という立場を打ち立てた。そのような関係の集積した〈場〉として、自身の創造性も働かせながら“語る人”こそ、民俗学が現在に至るまで捉えてきた人間像であるように思われる。これについては、佐藤健二1995「ライフヒストリー研究の位相」『ライフヒストリーの社会学』中野卓・桜井厚編、弘文堂、19頁を参照。

26 例えば、1983年には野村純一編「昔話の語り手」法政大学出版局、が出版された。

27 武田正1993「昔話の現象学:

かどうか」<sup>23</sup>と問う。これに対し野村は、

昔話の語り手というのは、根本的には“群れ”の中の“個”である。“群れ”の中の結実した“個”である。(中略)けれども、実態は、最終的には常民の一人に過ぎないということです。けれどもそこで、その人の“個”の営為でもって、同時に他の人にはない言葉を積極的に獲得していかないと、それは昔話の、つまり、語り手としての位置を獲得できないのではないかと、そのように思っております<sup>24</sup>。

と答えている<sup>25</sup>。

こうして1980年代には、民俗社会の中で語る個人であるところの語り手という研究視点が確立したといえそうだ<sup>26</sup>。1990年代に入ると、武田正が語りの座における語り手と聞き手の緊張関係や語り手の創造性を加味しながら、それを伝承を豊かにするものとして捉える視点を構築した<sup>27</sup>。90年代後半には川森博司が、かつての民俗社会における語りの場を論じた野村や武田に対して、現代の観光化された語りの場などでの昔話の語り手を積極的に論じた<sup>28</sup>。さらに、川森(2007)は過去の昔話研究に遡りながら昔話伝承の資料の成り立ちを再検討し、語りを変えたり省略したりする主体的な存在として語り手を捉え直す「語り手の実践」という視点を主張した<sup>29</sup>。

また、川森(2001)は語り手の研究が「昔話の語り手」以外の領域にも広がっていることに期待をかけながら、今後の研究方向として、「口承文芸の語りの継承」という課題と「現代社会における自己形成」の分析を示唆している<sup>30</sup>。これに関して、野村敬子の実践的研究は特筆に値する。野村は、50年間の昔話採訪の中で出会った語り手たちをまとめた著作(2008)で、口演童話活動をした僧侶や日本語で母国の民話を語る外国人花嫁などを取り上げ、昔話研究が扱ってきた「語り手」を「語り」をめぐる多様な活動をする人びとへと開いた<sup>31</sup>。また、野村(2010)では、研究者が対座する語り手が語る全ての語りを丸ごととらえようとする「口語り」という概念を導入し、語られる内容の領域をも無限に拡大した<sup>32</sup>。ここでは、語り手の体験や地域の歴史、一家の生業、他人から聞いた話や伝説など、“語る人”の口をついて出るあらゆる語りが「口語り」として一体のものとして示される。これは、口承文芸研究において1980年代末以降特に関心を注がれてきた「世間話」を主題とする研究の領域<sup>33</sup>や、近年の再帰的に自己言及する現代人ととらえようとする研究<sup>34</sup>にもつながるものである。「語り手論」は、聞き書きをその研究の主軸におく民俗学にとって、本質的な研究領域なのである。

野村は、本論の主題である「語り継ぐ人」を意識的に生み出そう

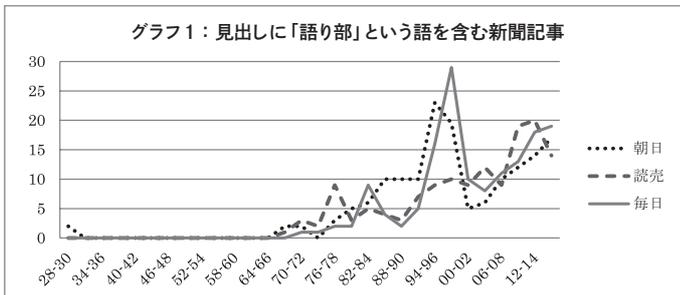
ともしている。彼女は研究者である自分自身を「聴き耳」と呼ぶが<sup>35</sup>、この「聴き耳」としての実践を一般の人びとにも広げる活動を行っている。それが、江戸川区において新潟県出身の語り手、中野ミツ氏の語りを聴き、継承しようとする「聴き耳の会」である。この会の参加者の多くは、自身も様々な場で「語り手」として活動する人たちである<sup>36</sup>。そこで、この会では「『聴き手』は継承を強く意識し、その語り総体を受け入れ、語りの場を構成する」<sup>37</sup>のである。

このようにして、今日民俗学的研究において「語り手」とされる人びとの領域はますます拡大している。これら「語り手」たちの今日的な在り方は、現代の「語り部」をめぐる社会状況とも関わり合いながら成立してきたものであると考えられる。しかし、民俗学では、研究者にとっての語り手が現代社会の中で「語り部」と呼ばれていたとしても、民俗学的研究としてはこれに微妙に距離をとろうとし<sup>38</sup>、観光の場を論じた川森も「語りべ」という呼称自体には焦点化していない<sup>39</sup>。このため、民俗学は現代の社会現象となっている語り部たちの問題と自身の研究を関係し合う一つの文脈で捉える視点を持つことができなかった。そこで、現代の語り部をとらえる民俗学・民俗誌を構想するために、以下では特に新聞というマスメディアを通して現代における語り部の生成の様相を明らかにしていく。

### 3. 新聞記事データベースに見る語り部の“死”と“誕生”

#### 3-1. 「語り部」という語の変遷

語り部は、結局のところ今日消えつつあるのだろうか、増えているのだろうか。三大紙と言われる朝日新聞、読売新聞、毎日新聞は、いずれも2009～2011年にかけて過去から現在までの記事をオンラインデータベース化し、新聞というマスメディア上での用語の使われ方を通時的に調査することが可能になった。これらの新聞記事データベースから「語り部」<sup>40</sup>を見出しに含む記事を検索し、3年ごとに集計してグラフ化すると、グラフ1のようになった<sup>41</sup>。



語り手と聞き手のつくる昔話世界』岩田書院。

28 その研究成果は、川森、前掲書、にまとめられている。

29 川森博司2007「昔話の語りの変容と語り手の実践：伝承の衰退の議論を読み替える」『日本民俗学』(251)、1-22頁。

30 川森博司2001「〈口承〉世間話・語り手論：現代に直面する口承研究」『日本民俗学』(227)、216-227頁。

31 野村敬子2008『語りの廻廊：「聴き耳」の五十年』瑞木書房。

32 野村敬子2010『栃木口語り：吹上現代故老に聴く』瑞木書房。

33 例えば重信幸彦1989「『世間話』再考：方法としての『世間話』へ」『日本民俗学』180、1-35頁、山田巖子1997「世間話と聞き書きと」『岩波講座日本文学史第17巻 口承文学2・アイヌ文学』久保田淳・栗坪良樹・野山嘉正・日野龍夫・藤井貞和編、岩波書店、135-156頁。

34 例えば、門田岳久2014「自分自身について語ること：民俗学における〈再帰性〉」門田・室井編、前掲書、森話社、226-259頁。

35 野村2008、前掲書。

36 これは、筆者自身が聴き耳の会に参加して得た情報である。

37 野村敬子2012『江戸川で聴いた中野ミツさんの昔語り：現代昔話継承の試み』瑞木書房、277頁。

38 特に昔話研究は、古代の「職掌としての語り部」という見方に囚われているように思われる。例えば、昔話研究者の稲田浩二は、「『語り手』は性別・職業・年齢などに関係なく広く昔話の伝承者を指す点で古代の『語り部』と

区別されるが、幾分かの類似はうかがえる」と、語り部をあくまで性別・職業・年齢などによって定められる「古代の『語り部』」として捉えている[稲田浩二1977「語り手」『日本昔話事典』稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編、弘文堂、205-206頁]。野村純一も、語り部について説明する中で、「部」が本来職業・職掌であったことを説明し、「現在たとえ同様の向きの専門職がいたとしても、正式名称としてこれを『語り部』として位置づけることはできないであろう」と現代の語り部を切り捨ててしまう。一方、野村は、「現在は地域社会にあって不特定多数の聴き手を相手に、積極的に昔話を語る人をしばしば『語り部』として処遇している」と述べて、遠野の昔話の「語り部」として処遇された鈴木サツを紹介する。そして、彼女が全国各地で昔話を語り歩き、これには「相応の報酬が伴ったことを示しながら、「客観的にいえば、昔話の語り手のこのような在りようはもはやほとんど職業的、もしくは半職業的のそれと判断しても誤りでない」と、鈴木のような語り手を「語り部」と見なすことに理解も示している。それでも、ここでの判断基準は、鈴木が「職業的な」語り手であるか否かにあり、社会の中で「語り部」として鈴木が処遇され、活動してきたことそれ自体によっては「語り部」と見なすことはできないという、現代社会に事実上存在している「語り部」から距離をとろうとする姿勢がうかがえるのである[野村純一1999「かたりべ」『日本民俗大辞典 上』福田アジオ他編、吉川弘文館、363頁]。

39 川森[2000、前掲書]では、観光の場における昔話のフィールドとして、遠野の「語り部ホール」で調査を行っている。しかし、ここでは「語り部ホール」の名には固有名詞以上の意味は読みこまれていないようである。これは、昔話研究の中の語り手論の現代的展開という本書の位置づけから

ここからわかるのは、そもそも語り部を見出し語に含む新聞記事は1964年頃までほとんど存在しなかったこと、そして、語り部が登場する記事は、短期的な増減はあるものの2017年まで全体を通して増加してきていることである。特に、第二次世界大戦から半世紀を迎え、阪神・淡路大震災によって新たに震災の語り部も生まれた1994～1996年には、急激に「語り部」を見出し語に含む記事が増加している<sup>42</sup>。

「語り部」という語を見出しに含む記事の数は、最高でも毎日新聞の3年間で29という数であり、決して多数ではない。しかし、2017年1月1日から12月31日までの1年間にデータベースに収録された「語り部」の語を本文に含む記事の数は、朝日新聞449件、読売新聞373件、毎日新聞405件となっており、この1年の間にも実に多くの語り部が新聞上で話題になっていたことがわかる。近年の記事の中で特に目立つのは、本論の冒頭に触れたような東日本大震災に関する語り部や、沖縄戦・原爆・空襲などの戦争体験に関わる語り部であるが、水俣病やハンセン病の語り部、ジオパークについて語る語り部<sup>43</sup>、そして外国人研究者を築地市場の語り部とした記事<sup>44</sup>まであり、新聞紙上では実に様々な人びとが「語り部」として紹介されていることがわかる。

このような新聞紙上での多様な「語り部」の登場は、新聞記者の修辭的な表現に過ぎないのではないかという気もする。しかし、ある種の新しい語り部たちは、明確に「語り部」としての地位を認められて社会に定着している。その事實は、国語辞典における「語り部」の語義の変化からも確認できる。1973年発行の『日本国語大辞典』は、「語り部」を以下のように説明している。

上代、文字のなかった時代に語り伝えられてきた史実、伝説等を保存し、語り伝えることを職とした者。奈良時代にはすでに形式化し、平安時代に大嘗祭(だいじょうさい)などの儀式の時に美濃、丹波、出雲等の諸国から召集されて、古詞を奏した。永徳三年(一三三三)頃にはこれも廃止された。かたらいべ<sup>45</sup>。

ところが、同じ『日本国語大辞典』の2001年に発行された第2版には、「語り部」に第2の意味が加えられている。

②昔話や戦争体験などを次代に語り伝える者をいう<sup>46</sup>。

ここでは、過去に生きた特別な職掌の人びとではなく、昔話や戦争体験などを語り伝える、現代社会に生きる人びとが「語り部」とされるのである。他のいくつかの辞書を見ても、同様に第2の意味

の追加が行われている<sup>47</sup>。国語辞典における語義は現実の語の使用に合わせて変更されるものであるから、「語り部」の第2の意味は、1990年代～2000年代の間には少なくとも社会に定着していたと推測できる。現代社会には、確かに新しい語り部が誕生していたのだ。

参照した国語辞典の記述にはばらつきがあったが、これらの記述から「語り部」の新しい語義について二つの特徴が読み取れる。

一つ目は、何を語るのかに関する特徴である。語る内容は、上の引用部からもわかる通り、大きく「昔話」と「過去の体験」の2点があげられる。しかし、この定義づけは曖昧なものでもあり、「広く、物事を次の世代に語り伝える人」<sup>48</sup>のように抽象的な記述をとる辞書も多い<sup>49</sup>。一方で、「過去の体験」だけを取り上げる辞書も複数ある<sup>50</sup>。抽象的な説明を採用している国語辞典でも、全て例文としていたのは「被爆体験の語り部」<sup>51</sup>とか、「戦争体験の語り部」<sup>52</sup>のような体験を語る語り部である。ここから、なぜ今日語り部は消滅の危機に瀕していると言われ続けるのかももうかがえる。現代社会には、さまざまな語り部が生まれているが、その中でも最も重要視されているのが、体験、特に戦争体験を語る語り部なのである。

語り部の第2の語義における二つ目の特徴は、ほとんどの辞書において、語り部とはそれらの語りを「次代に」<sup>53</sup>・「後世に」<sup>54</sup>伝える者だと説明されている点である。したがって、語り部を問題化する時、そこには必然的に、継承、あるいは伝承の問題が立ちあがってくるのだ。以下、国語辞典が示してくれる論点をもとに、最も代表的な語り部である過去の体験を語る語り部について新聞記事の内容を細かく見ていこう<sup>55</sup>。

### 3-2. 〈体験の語り部〉

過去の体験を語る語り部としては、広島・長崎の被爆体験者、沖縄戦の体験者、特にひめゆり学徒隊出身者、東京大空襲を筆頭に各所での空襲体験をもつ人びと、そして、生き残った特攻隊の人びとや旧軍人による不戦兵士の会など、多様な語り部が数多く記事になっている。これらの人びとの活動によって、語り部は「体験を伝える人」として定着していったと考えられる。

新聞記事データベースで検索可能な範囲で最も早く戦争体験者を語り部と名付けているのは、朝日新聞1970年8月5日の「(14)かたりべ\_\_ヒロシマ・ナガサキ25年」である。ここでは、日本被団協理事長、原水禁国民会議代表委員も務め、1946年から被爆体験などを語り続けてきたという森滝市郎氏が紹介される。新聞記事を追っていくと、その後、80年代には被爆者の語り部団体の海外遠征も含めた活動が多く記事になり、80年代は被爆体験の語り部たちが最も意欲的に活動範囲を広げていった時期であったことがうかがえ

すれば問題ない。しかし、このホールの名前が「語り部ホール」であったことを考慮すると、「語り部」が焦点化される現代の日本における記憶への関心の在り方をめぐる、より多角的な視点を持つことが可能であると考ええる。

40 演算子“or”により、以下のいずれかの表記を含む記事を検索した：語り部／語り部／語り部／語り部／かたり部／かたり部／かたり部。

41 朝日新聞[朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」、読売新聞[ヨミダス歴史館(読売新聞記事データベース)、毎日新聞[毎索(毎日新聞記事データベース)]]の3紙のデータベースを参照した。いずれのデータベースも、年ごとの記事収録範囲は同一ではなく、年代が新しいものほど収録される紙面が増えている。また、朝日新聞では1984年8月～、読売新聞では1986年9月～、毎日新聞では1987年～のみしか本文検索に対応していない。そこで、ここではデータベースの機能上最も誤差の少ない条件の下で記事の増加率を見るために、各社とも東京版の本紙および東京の地方版の、朝刊の記事のみを検索対象とし、見出し語検索を用いて、記事の見出しに「語り部／語り部／語り部／語り部／かたり部／かたり部／かたり部」の語を含む記事を検索して集計した(その際、「語り部」に関しては、例えば「～学校英語部」のように、「ごぶ」と読ませるものを個別に除外した)。なお、朝日新聞の、1985年以前の新聞紙面画像のみが閲覧できる「朝日新聞縮刷版1879-1999」では、東京版の本紙および東京都心部に配布された地方版の紙面のみが検索できる仕組みになっていることから、1985年以降についても、東京都心部に配布されたと思われる紙面のみを集計した。これに際し、地域を示す面名が常に変更されているため、個別の面名については筆者の判断によって振り分けを行ったことをお断り

する。読売新聞についても東京都の地方版の内、多摩版は1999年以降のみの収録であるため、集計に際して除外した。毎日新聞も2008年からのみ収録されている多摩版の記事は除外した。また、朝日新聞では、1985年から1999年の間は、見出し語検索にしか対応していない「朝日新聞縮刷版1879-1999」と、見出し語検索・本文検索が共に可能で、テキスト化された記事を検索できる「朝日新聞1985～週刊朝日・AERA」という検索システムが併存している。両者は見出しの付け方が微妙に異なっており、集計結果に誤差が見られたので、1985年～1999年の数値は、その平均値をグラフ上に示した。

42 第二次世界大戦から半世紀という節目であったこと、阪神・淡路大震災の発生に加え、1994～1996年に「語り部」を見出しに含む記事が増加したのは、後述の通り、戦争体験を語る人びとを語り部と呼称することが定着し、さらにより多様な領域で語り部という呼称が使われるようになったことが関係しているように思われる。例えば、朝日新聞では、朝日新聞厚生文化事業団が、1992年にはじまった障害のある人たちが民話や創作童話などを語る「わたぼうし語り部コンクール」(財団法人たんぼぼの家主催)の後援団体の一つとなり、以降毎年応募案内やグランプリ受賞者の記事を掲載するようになった。エイズ・ハンセン病の語り部が新聞記事上に登場するのも、この時期が初めてである。国立ハンセン病資料館のHPによれば、ハンセン病の語り部活動は、1993年高松宮ハンセン病記念資料館の開館と共に始まったという[国立ハンセン病資料館HP「語り部活動とは?」[http://www.hansen-dis.jp/07gid/kataribe\(2018/06/10閲覧\)](http://www.hansen-dis.jp/07gid/kataribe(2018/06/10閲覧))]。また、毎日新聞1995年7月17日には作家の石牟礼道子氏を水俣の語り部と呼ぶ記事が掲載されるが、水俣市立水俣病資料館で「語り部制

る。〈体験の語り部〉は、90年代になると第五福竜丸の被爆者、エイズ感染者、水俣病・ハンセン病患者、そして阪神・淡路大震災後は震災の語り部などと広がり、2011年以降は震災体験の語り部が急増している。

### 3-3. 「語り部の死」を伝える記事

語り部は消えつつあるのか、増えつつあるのか。この問題を考える本論にとって重要なのが、語り部の死を伝える記事の多さである。戦争体験者が語り部として新聞記事に見られるようになった初期の頃と言える1979年2月21日の朝日新聞夕刊は、既に「爆心地近くで被爆の老人死ぬ『かたりべ』また一人…」として、被爆体験の「かたりべ」金子弥吉氏の死を伝えている。柳田國男は『明治大正史世相篇』で、新聞記事の史料としての性格を、平凡なものを記述せず「その変更のいわゆる尖端的なもののみが採録せられ」<sup>56</sup>のものと批判している。逆に言えば新聞記事になったものとは、少なくとも新聞記者たちにとっては現代生活における重大な変更と認められるものであったといえる。つまり、語り部が記事になり始めた頃から、「語り部の死」は社会にとって重大な事件だったのである。

グラフ1に示した「語り部」を見出し語に含む記事の内、語り部の死や、語り部団体の解散を主題とする記事は、表1に示す通り58件だった。これは、グラフ1中に含まれる全記事の約13%にあたる。

ここで注意しておきたい点は、表1に見られる通りこれまで実に幅広い物事を語った語り部の死が報じられてきたが、この中にはしばしば、訃報記事によって初めて「語り部」としてその名が歴史に刻み込まれたと思われる例があることである。例えば、上述の被爆「かたりべ」として訃報記事が掲載された金子弥吉氏は、爆心地付近で被爆した生き証人として貴重であり、被爆者として山口県の被爆者救護、原水爆禁止運動に余生をささげたことが記述される。しかし、「かたりべ」として国語辞典における説明のような「被爆体験を後世に語り継ぐ」活動をしていたという記述はない。たった5人しかいなかった爆心地から半径500m以内の地上での被爆生存者という、金子氏の「生き証人」としての貴重さが、記者にカギ括弧を伴った「かたりべ」の見出しを付けさせたように見受けられる。

一方、実際に生前「語り部」として活動を行ってきた人物の訃報に際しては、しばしば語り部として語るべき過去の体験の内容以上に、その人物が語り部になるまでの経緯も含めた語り部の個人史が報じられている。例えば、長崎の被爆者、吉田勝二氏の追悼記事「悼む：長崎原爆の語り部、吉田勝二さん＝4月1日死去・78歳」(毎日新聞2010年5月2日)では、吉田氏の被爆体験と共にその後の人生が語られる。吉田氏は、原爆により顔の右半分を焼かれ、皮膚の

表1 グラフ1中の語り部の死や語り部団体の解散を主題とする記事一覧

1	1975.2.19	読売	139歳語りべ老女死ぬ／ソ連
2	1982.5.7	読売	“遠野の語り部”死去
3	1982.3.19	毎日	記者の目＝遠野の語り部逝く
4	1991.5.29	読売	戦後復興を支えた“昭和の語り部”故勝田竜夫・日債銀名誉会長
5	1993.3.16	毎日	[余録] 原爆の語り部、渡辺千恵子さん死去
6	1993.9.13	朝日	「福竜丸」の語り部 久保山すずさん死去 死去
7	1993.9.13	読売	久保山 すずさん(第五福竜丸・故久保山愛吉さんの妻) 死去 福竜丸の語り部
8	1993.9.18	朝日	原水爆禁止運動の語り部 故久保山さんの生き方 本に一般情報
9	1993.10.3	朝日	200万人以上に伝えてきた被ばくの悲劇「語り部」を失い岐路に
10	1995.2.17	朝日	『毛沢東の私生活』著者の急死 権力の内幕の語り部失う_中国
11	1996.9.11	朝日	霧社事件語り部死去_台湾
12	1998.11.12	朝日	映画と抱き合い85年 笑顔の語り部 渋面の批評家_淀川長治氏
13	1999.10.21	読売	障害者の語り部コンクール、劇場閉館で23日に終止符 来年は新たな催しを
14	2000.7.26	毎日	[ニュースの言葉] 原爆の語り部
15	2000.8.2	読売	「ヒロシマを語る会」来年3月で解散 高齢、資金… 語り部の「岐路」
16	2000.11.9	毎日	[マルチういんどー] 原爆の語り部逝く 夫妻を救った市松人形 /東京
17	2001.7.22	読売	[追悼抄]6月 歴史研究者・青木孝寿さん 遺物こそ戦争の語り部
18	2002.7.11	読売	[編集手帳] 骨っぽい学者の顔・温和な語り部の顔…佐原真さん逝く
19	2004.1.12	朝日	千葉龍夫氏死去「ハンセン病」語り部
20	2004.6.22	朝日	田中政治の語り部去る 鋭かった政治勘 早坂茂三さん死去
21	2004.6.20	読売	[追悼抄]4月 地球物理学者・竹内均さん TV、雑誌…科学の語り部
22	2006.3.4	読売	[編集手帳] 時の語り部、久世光彦さん逝く
23	2006.5.11	毎日	松野頼三氏死去：戦後政治の「語り部」 小泉人事に助言も
24	2006.9.22	読売	[記者ノート]「郡」消える歴史の語り部
25	2008.2.28	毎日	訃報：杉本栄子さん 69歳 死去＝水俣病語り部
26	2008.4.2	毎日	悼む：水俣病語り部・杉本栄子さん＝2月28日死去・69歳
27	2009.6.2	朝日	タイタニック最後の語り部、死去 英のディーニンさん、97歳
28	2010.1.31	読売	安藤俊子さん(ひとり語りの語り部) 死去
29	2010.4.2	毎日	葬儀：吉田勝二さん＝長崎原爆の語り部・1日死去
30	2010.5.2	毎日	悼む：長崎原爆の語り部、吉田勝二さん＝4月1日死去・78歳
31	2010.6.1	毎日	訃報：本多立太郎さん 96歳＝戦争体験の語り部
32	2010.7.27	毎日	中村祐造さん死去：日本バレーの語り部 72年五輪、準決勝で大逆転貢献
33	2010.6.2	読売	本多立太郎氏死去 戦争体験語り部
34	2011.7.13	朝日	沼田鈴子さん死去 広島被爆の語り部
35	2011.7.13	読売	故沼田鈴子さん(広島被爆体験の語り部)の告別式
36	2011.7.13	毎日	葬儀：沼田鈴子さん＝被爆アオギリの語り部・12日死去
37	2011.8.21	毎日	悼む：被爆アオギリの語り部、沼田鈴子さん＝7月12日死去・87歳
38	2011.9.1	毎日	訃報：渡辺司さん 79歳＝被爆体験朗読劇「命ありて」の語り部
39	2011.9.14	毎日	記者の目：「被爆の語り部」沼田さんの死＝吉川雄策(山口支局)
40	2012.1.4	読売	外林秀人氏(ドイツ在住の被爆語り部) 死去
41	2013.2.4	朝日	山岡ミチコさん死去「原爆乙女」の語り部
42	2012.6.14	毎日	みんなの広場：反戦の語り部だった新藤監督＝無職・池谷修一・62
43	2013.8.14	読売	森浩一さんをしのぶ 考古学の語り部 地域に光 大塚初重(寄稿)

44	2014.3.14	朝日	名バーテンダー、忘れない 立川の語り部、87歳ジミーさん逝く / 東京都
45	2014.4.19	毎日	評伝：ガルシア・マルケスさん死去 自由な発想の「語り部」南米の現実活写
46	2014.6.23	毎日	悼む：長崎原爆の語り部・松添博さん= 4月13日死去・83歳
47	2014.11.13	読売	松島圭次郎さん死去 被爆体験 英語で語り部
48	2015.1.4	朝日	片岡ツヨさん死去 被爆し顔やけど、語り部 93歳
49	2015.1.4	毎日	訃報：片岡ツヨさん 93歳 = 長崎原爆被爆の語り部
50	2015.1.4	読売	宮城喜久子さん(元ひめゆり平和祈念資料館副館長) 死去ひめゆり学徒隊語り部
51	2015.1.4	読売	片岡ツヨさん(長崎原爆被爆者) 死去 長崎原爆の語り部
52	2015.6.23	読売	杉本雄氏(熊本県水俣市立水俣病資料館語り部) 死去
53	2015.12.17	朝日	沢井余志郎さん死去「四日市公害」語り部
54	2015.12.17	毎日	訃報：沢井余志郎さん 87歳 = 四日市公害の語り部
55	2016.2.1	毎日	悼む：四日市公害の語り部・沢井余志郎さん = 2015年12月16日死去・87歳
56	2016.4.3	朝日	初空襲の“語り部”去る 葛飾区教育資料館、30年の歴史に幕 / 東京都
57	2016.4.10	読売	金子スミ子さん(熊本県水俣市立水俣病資料館語り部) 死去
58	2016.8.15	朝日	老いる語り部、継承に苦悩 戦争体験者団体、解散続く 終戦71年

度」が始まったのも、1994年10月である[水俣市立水俣病資料館HP「語り部制度」<http://www.minamata195651.jp/kataribe.html>(2018/06/10閲覧)]。

この他にも、ラジオパーソナリティや大河ドラマのナレーターを「語り部」として報じたものや、朗読・インドの紙芝居、自然環境、歴史、ホロコースト、銃使用の問題を語る語り部などがグラフ1中の記事の中には含まれている。また、1997～1999年にグラフ1の数値が最も高くなっている毎日新聞は、1998年に21回にわたり「100年の語り部」というシリーズ記事を掲載し、20世紀の歴史的な出来事にかかわりのある人物からのインタビューを掲載した。

43 「(ひとときらり) 平田和彦さん 30歳 むつ市ジオパーク推進員 / 青森県」朝日新聞青森県地方版、2017年1月12日。

44 「(ひと) テオドル・ベスターさん 築地市場の『語り部』を務めた米国人」朝日新聞本紙朝刊、2016年10月21日。

45 日本大辞典刊行会、前掲書、664頁。

46 日本国語大辞典第二版編集

移植手術には成功したものの、顔にケロイドが残った。そして、食料品卸会社に就職しても上司から差別を受け、引きこもった。

涙をぬぐって外に出るようになったのは、母の言葉があったからだ。「逆の立場になったら、あなたが部下を差別しない人になりなさい」。以降、被爆講話にも取り組んだ。

と書かれている。

3紙の記事を確認した中で最も多く新聞記事になっているのが、広島市の被爆者であり、語り部の会「ヒロシマを語る会」でも活躍した沼田鈴子氏だ。その訃報も、各紙の各本社版で繰り返し記事になっている。例えば、朝日新聞は沼田氏の人生をこう振り返る<sup>57</sup>。

爆心地から1キロ強の広島通信局<sup>ていしん</sup>で被爆し、左足を失った。婚約者も戦死。自殺を思った時、通信局の庭で焼けたアオギリが新芽を出しているのを見た。「私も生きなきゃ」。地元の高校・短大で28年間教壇に立つ。退職後の1981年、市民運動で日本へ戻った米軍のフィルムに、被爆直後の自分の姿が映っていると伝えられ、体験を語り始めた。「ずっと沈黙してきたことに<sup>とくじ</sup>忸怩たる思いがあったのでは」。最初に証言を依頼した永井秀明さん(75)は言う。

沼田氏が「被爆アオギリの語り部」と呼ばれるきっかけとなった物語と、フィルムに映った自らを見て、忸怩たる思いを抱えながらも沈黙していた被爆体験を語り始める経緯が、簡潔にまとまっている。

また、朝日新聞2015年1月4日の長崎の被爆者、片岡ツヨ氏の計報記事は、カトリック教徒で13人の肉親を失った片岡氏の人生を以下のように伝える。

原爆は「神の摂理」によって与えられた試練だとする被爆医師の故・永井隆博士が説いた考えに触れ、「(神は)なぜそんなむごいことを」と信仰に迷いを持ち続けたという。81年にローマ法王ヨハネ・パウロ2世(故人)が訪日した際、「戦争は人間の仕業」との言葉に救われたという。それ以降、「自分を平和の道具として使ってほしい」と語り部を始めた。修学旅行生らに体験を語る際には、「この顔ば、もっとよく見んね」と訴えた。

これらの被爆体験者たちの死に関する記事は、いずれも彼／彼女らが被爆後どのようにして語り部としての活動を始めたのかを教えてください。そして、いかに彼／彼女が語り部になったかを語るこの短い記事からも、壮絶な人生と被爆者としての説得力のあるメッセージが伝わってくるのである。

### 3-4. 「語り部になる」経験を伝える記事

一方、新聞記事は多くの語り部の「誕生」の瞬間も捉えてきた。確かに、多くの体験者が語らない中で「語り部になる」という経験は重たい意味を持つだろう。語り部の死に関する記事の中にも、語り部の語り伝える体験の内容と共に、語り部たちがいかにして語り部になったのかが描かれていた。語り部が高齢化し亡くなるのが現代社会にとって尖端的な事件ならば、そのような中で「語り部になる」人びとがいるということもまた尖端的な事件だったのである。

1985年8月12日の朝日新聞「(5)写真『右腕負傷の少女は私』いま沖縄戦の語り部に\_\_夏草の祈りあの時子どもだった」は、沼田氏と同様写真に写った自身の姿がきっかけとなって語り部となった沖縄戦体験者、玉那覇春子氏を紹介する<sup>58</sup>。この記事は、沖縄では今「戦場ぬ童」という映画の自主上映が盛んで、その映画に出演して積極的に自身の戦争体験を語る46歳の玉那覇氏が、「若い語り部」として期待されているという内容を伝える。

また、朝日新聞の1994年8月10日の記事は、「広島市の村から(2)話したくない気持ちを抑え 洋子は『原爆の語り部』になる」という見出しを付されている。母校で教員として子どもたちに被爆体験を伝える西名洋子氏の被爆体験を、彼女が語り部になったというメタストーリーで包み込んでいるのがこの記事である。「兄が爆死し、被爆直後の広島に入って二次被爆した父をも、やがて血液の病気で失った洋子が、その体験を教え子たちに話すようになったのは九年

委員会編2001『日本国語大辞典』第2版第3巻、小学館、752頁。

47 岩波書店の『岩波国語辞典』では第6版(2000年発行)と第7版(2009年発行)、同じく岩波書店の『広辞苑』では第5版(1998年発行)と第6版(2008年発行)、三省堂の『大辞林』では初版(1988年発行)と第2版(1995年発行)、そして、同じく三省堂の『三省堂国語辞典』では第5版(2001年発行)と第6版(2008年発行)の間で「語り部」の語義の記述に変化が見られた。また、1986年が初版の小学館『国語大辞典言泉』、1994年が初版の明治書院『精選国語辞典』、2003年が初版の大修館書店『明鏡国語辞典 携帯版』にも、「語り部」の第2の意味が掲載されている。なお、『新明解国語辞典』では、最新版(第7版、2012年発行)でも第2の意味は追加されていない。

48 『広辞苑』第6版。

49 他に、「ある事柄を」『明鏡国語辞典 携帯版』、「ある物事を」『国語大辞典言泉』。

50 「実体験を」『三省堂国語辞典』(第6版)、「比喩的には、自分の(古い)体験・見聞を」『岩波国語辞典』(第7版)、「転じて、自ら体験・伝聞したことを」『大辞林』(第2版)。

51 『広辞苑』(第6版)。

52 『国語大辞典言泉』。

53 『日本国語大辞典』(第2版)。

54 『三省堂国語辞典』(第6版)。

55 以下、個別記事の分析にあたっては基本的にグラフ1の中に集計した記事を参照したが、必要に応じてこれ以外の記事も分析の対象としている。そこで、東京本社版・東京地方版以外の記

事を取り上げる時は、引用に際してそのことを明記した。なお、ここでは体験を語る語り部しか取り上げないが、新聞記事からは、語り部という言葉が新聞記事に見られるようになった当初、民俗学と非常に近い領域から生まれてきた名付けであったことがうかがえる。1971～72年にかけて初めて3紙にそろって紹介された語り部で、飛騨の農家に生きた義祖母の語りを伝える『飛騨のかたりべぬい女物語』の著者である小鷹ふさ氏は、国文学者金田一春彦が自身の話を聞きに来たことなどをきっかけに語り始め、ここ10年は学生が飛騨の生活や昔話を聞きにくるようになったのだと語っている。また、小鷹氏の次に1977年に3紙にそろって紹介された『狩りの語り部』著者の松山義雄氏は、自身の仕事を民俗学として意識していることが記事に書かれている。ここから分かる通り、語り部という呼び名がまだそれほど社会的影響力をもたない中で、民俗学に関わるところで他者の語りを聞き取った人たちが、その“語る人”を「語り部」だと認識していたのが、1970年代の新聞記事に見られる一つの代表的な「語り部」だった。この後も、子どもに昔話や民話を語る語り部や、朗読を行う人びとなど、口承文芸研究と重なり合う分野で活動する人びとが、語り部としてしばしば紹介されている。これは、国語辞典の第2の語義で「過去の体験」に並んで「昔話」が取り上げられていることから明らかである。また、多くの語り手を見出してきた昔話研究者の水沢謙一は、「おばあちゃんの夜語り」において、一人で百話以上も語る豊かな語り手を村では〈むかし語り〉と呼んでいたとし、勢い余ったのか、「じぶんのうちの子どもばかりでなく、村の子どもたちにも、昔話を語っていました。いわば、村の語り部だったのです」[水沢1978、平凡社、278頁]と述べている。野村純一もその編著『昔話の語り手』で、この水沢の文章を引用しながら、昔話の語り手が地域において「格別の位

前、母校に赴任したのがきっかけだった」と記事は伝える。

この他にも、家族にも話さなかった被爆体験を子どもの自殺のニュースを見て語り出したという谷口恵美氏の経験を伝える記事<sup>59</sup>や、空襲体験について「戦後、当時の様子を他人に話すことはなかった」という橋本代志子氏が、幾度かの契機を経て語り部になっていく様子を伝える記事<sup>60</sup>なども「語り部」なる、「語りだす」という見出しで「語り部になる」人びとの経験を伝えている。

### 3-5. 死をきっかけに語り部を継ぐ

「語り部の死」と「語り部になる」こと、すなわち「語り部の誕生」は、現代社会にとって特筆すべき事件であることを述べてきた。戦争体験者たちが語り出すきっかけとして、より年配の体験者たちの死や高齢化が大きな契機になることも、新聞記事は捉えている<sup>61</sup>。さらに新聞は、私たちの社会が語り部を失う時、それをきっかけに語り部を継ぐ新しい語り部が生まれることも記録している。

新聞記事は、早くから語り部の高齢化にともなって「若い語り部」を育てようという気運が高まっていたことや<sup>62</sup>、被爆体験のない人達が「第二の語り部」を務めることに対して被爆者から反対の声があがっていたことを伝えている<sup>63</sup>。さらに2000年、1984年から修学旅行生を相手に被爆体験を語ってきた「ヒロシマを語る会」が高齢化を理由に解散を決めたことが、被爆体験の語り継ぎに関心を抱く人びとに衝撃を与えたようである<sup>64</sup>。

当初、語り継ぎは各所で個別に生まれるものだった。例えば、1987年8月10日の毎日新聞朝刊「長崎・平和祈念式典で献水役の被爆二世が母の願い伝承を誓う」は、昨年他界した被爆者で原爆青年乙女の会の会員でもあった語り部多久春子氏の娘で19歳の多久栄代美氏が「平和祈念像前の奉安所に遺族代表として献水した」という記事である。「母の願い伝承を誓う」と見出しに記された彼女は、「私は母のように被爆体験は語れませんが、被爆者だった母の強さを語り伝えたいと思っています」と述べたとされる。「語り部の死」は、新たな語り部、新聞記事に用いられた言葉を借りれば、「若い語り部」、「第二の語り部」の生まれる契機となるのだ。

2010年6月20日の朝日新聞「(核なき世界へ NPT再検討会議)被爆語り部の遺志継ぐ 開催地NYで高3が紙芝居」は、上述の2010年に亡くなった語り部吉田勝二氏が使っていた紙芝居を、ニューヨークに派遣される市民団体の代表団メンバーに選ばれた高校3年生の林田光弘氏が上演する予定だというニュースである。

吉田さんが入院していると聞き、「代わりに紙芝居を持っていこう」と考えていた矢先に悲報に接した。「もっとたくさん

人に伝えたいと思っていたはずだ」と決意を新たにした。締めくくりのせりふは「平和の原点は、人の痛みがわかる心を持つことです」を英語で。吉田さんがいつも口にしてきた言葉だ。

と記事は締めくくられる。差別された時、母から「あなたが差別しない人になりなさい」と言われたことが語り部になるきっかけとなったと訃報記事に伝えられていた吉田氏のメッセージが、「第二の語り部」である林田氏に伝わり、林田氏の口を通して世界に伝えられていくという道筋が、二つの記事を通して浮かび上がってくる。

2000年代半ばに入ると、語り部が死ぬという記事も増加してくるが、それに限らず、語り部を継ぐというテーマをめぐる記事がかなりの規模を占めるようになってくる。例えば、2005年7月29日の読売新聞大阪本社夕刊「[戦後60年・ヒロシマから]被爆語り部をバトン 79歳“引退”2世が継承」は、

ヒロシマでの被爆体験を、証言してきた広島市安佐北区の高蔵信子さん(79)が今年限りで第一線から退き、被爆2世で朗読ボランティアを務める同市東区の旅館<sup>むかふ</sup>の女将、小林真紀さん(47)が「語り部」活動を引き継ぐ。

と伝える。被爆2世である小林氏の父は、「本当につらいことは言葉に出来ない」と言って被爆体験を語らなかつたものの、晩年入院すると「助けられなかつた」などとうなされた。そんな父を見て、小林氏は父の死後、「父が言えなかつた思いを私が語ろう」と国立広島原爆死没者追悼平和祈念館の朗読ボランティアに応募したという。高蔵氏も1965年に求めに応じて体験記を書こうとした際には生々しい記憶が蘇って中断したことがあり、それでも少しずつ語り始めて91年に広島平和記念資料館の被爆体験証言者に登録した経験を持つ。その人に話すかどうか苦しんだ姿が父の姿と重なって、小林氏は高蔵氏を訪ね、高蔵氏から思いを託されたと語られる。ここでは、短い記事の中に、体験を語るか語らないかと苦悩した二人の被爆者と、「語り部」になった二人の人物の物語が、小林氏がいかにして語り部になったかを語ることを通して描き出されている。

このように、語り部の死や、語り部が高齢化し、間もなくいなくなってしまうという意識がきっかけとなって、実は1980年代から脈々と、語り部を継ぎ、語り部になるというテーマが繰り返して新聞記事になってきたのである。

### 3-6. 語り部を継ぐ人びとの制度化

このような中で、2000年代から新聞記事に目立って見られるの

置を占めていたであろうことを論じているのである[野村1953、前掲書、249-251頁]。したがって、実は語り部という呼び名が人口に膾炙していく過程と、昔話研究や昔話採集との関係も深く、民俗学と「語り部」の関係は複雑なものであると言えるが、本論ではこれ以上取り上げない。

56 柳田國男1993『明治大正世相篇』、講談社学術文庫、5-6頁。

57 「(惜別) 広島市の被爆体験の語り部・沼田鈴子さん アオギリに励まされ、世界へ平和の種」朝日新聞夕刊、2011年7月30日。

58 先述の沼田鈴子氏も、記録フィルムに映された被爆後の自身の写真を見て語り部となる決意をしたことで有名な語り部だった。同じく先述の片岡ツヨ氏もまた、写真家東松照明氏による写真によって海外にまでその姿が発信された人物である[表1、49・51の記事参照]。本論では詳述する紙幅がないが、このように、複数の現代の(体験の語り部)において、4. 考察において論じるアライダ・アスマンの述べた「経験記憶」の「文化的記憶」への移し替えが、「経験記憶」をもった本人がまだ生きているうちから行われ、過去の自分自身の姿に写真という自分から切り離された客体を通して出会うという経験が存在していることは、現代の語り部が「語り部になる」経験を捉えるうえで、もう一つの重要なポイントであると言える。

59 「(4) 語り部 沈黙51年、今語りだす\_あの日から明日へ 被爆51年」朝日新聞朝刊、1996年8月3日。

60 「[街ひと春] 東京大空襲(上) 悲劇伝える語り部に 家族への鎮魂の折り込め」読売新聞朝刊、1993年3月9日。

61 例えば、「2001夏鎮魂(2) 減りゆく語り部(連載)」読売新聞

西部版朝刊、2001年8月12日、「特攻の悲劇 封印した過去、手記に 佐賀の元隊員『生き残り』悩み…語り部」読売新聞西部版夕刊、2004年8月12日など。

62 「被爆の若い語りべ求め 広島、長崎の証言の会 初めての交流集会開く」朝日新聞朝刊、1985年6月3日。

63 「(4)語り部 沈黙51年、今語りだす\_\_あの日から明日へ被爆51年」朝日新聞朝刊、1996年8月3日。

64 2000年7月19日の毎日新聞「[みんなの広場]語り部にしか伝えられないことも=フリーライター・沢田正治・50」では、フリーライターの沢田正治氏が、「ヒロシマを語る会」の解散に触れながら、「原爆の語り部が健在なうちに、次代の語り部たる人々を養成しておき、口から耳への伝達方式を維持することはできないだろうか」と、語り部の語りをあくまで口から耳へと語り継ぐことの必要性を主張している。

65 広島平和記念資料館「被爆体験講話等オンライン予約システム」<https://www.hpmm-testimony.jp/> (2018/03/30閲覧)、公益財団法人 長崎平和推進協会「被爆体験講話」<https://www.peace-wing-n.or.jp/profile.html> (2018/03/30閲覧)。

が、語り部を継ぐ人びとが地方自治体や国の制度のもとに生まれていく過程である。もともと戦争体験者たちが語り部として活動する際にも、何らかの組織や制度上の位置づけは存在したはずだ。現在でも、広島平和記念資料館での被爆体験講話や、長崎原爆資料館などでの公益財団法人長崎平和推進協会による被爆体験講話が行われており、これらが被爆体験の語り部たちの一つの主な活動場所になっていると考えられる<sup>65</sup>。しかし、これまで検討してきた記事の中では、「ヒロシマを語る会」の解散を除いては、これらの組織や制度そのものが記事の中心となることはなかった。個別の語り部たちが、具体的にどこで活動しているのか明白ではない場合も多かった。これに対し、体験をもたない人びとに関わる記事ではその組織の誕生や制度化自体が尖端的な事件としてニュース化されている。特に、近年では地方自治体や国がその制度を運用している点が特徴的である。

2001年8月6日の読売新聞は、「[ボランティア2001]次世代の『語り部』」として、1998年から広島平和記念資料館で養成が始まったヒロシマピースボランティアを紹介している。「高齢化する被爆者に代わって原爆投下の悲劇を語り継ぐ」ボランティアであると説明され、これまでに10回の講習を受けた1～3期162人が資料館の展示解説や平和記念公園内の慰霊碑案内などを行っているという。

また、2005年6月23日の読売新聞、「[戦後60年]6・23沖繩戦終結(4)『使命』継ぐ、20代語り部(連載)」では、「語り部候補生」としてこの年ひめゆり平和祈念資料館に就職した仲田晃子氏を紹介する。そして、「私自身、戦争を体験していないのだから、体験したように話しても意味がない。どうやって伝えるか、じっくりと考えます」と、仲田氏のことばを紹介する。仲田氏ら「語り部候補生」は、これまでひめゆり平和祈念資料館で自身の体験を証言してきた「証言員」に対して、「説明員」という肩書きを与えられている。こうして、後継者を育て、元ひめゆり学徒隊の語り部たちは引退をしていく。2015年2月19日朝日新聞では、「(戦争のリアル:4)ひめゆり、語り部の引退 戦後70年・第2部」として、長年多くの講話を行ってきた語り部たちの講話からの引退を伝える。そして、「空白を埋めていくのは戦争を知らない世代。その一人、仲田晃子(38)は言う。『体験者が言葉にできなかった思いを伝えたい』20、30代の後継者がまもなく、ひめゆりを語り始める」と締めくくる。ここで10年の間継承を意識して活動してきた仲田氏は、被爆体験を語れなかった父の思いを語ろうとした小林真紀氏と同じように、「体験者が言葉にできなかった思いを伝えたい」という結論に至っている。

被爆体験者については、個人から個人へのより単線的な語り継ぎが試みられている。2015年9月7日の毎日新聞社説「戦後70年・視

点 語り部なき後 体験を継承する可能性＝論説委員・花谷寿人」は、広島市でこの春から「被爆体験伝承者」の1期生が講話をしていると報じる。これは、「被爆の証言者の中から『先生』を選んで対話を重ね、講話の原稿を書き上げる」という手法で語り部を継ごうとするものである。養成自体は、2012年度から始まった。論説委員は、このうち「伝承者」の細川あや子氏の話に引き込まれたという。

先生は10歳で原爆孤児になった御堂義之さん。細川さんは戦後生まれの50代の自分にできるのか悩んだ。被爆体験を尋ねるうちに、本人が話してこなかったことを初めて聞いた。御堂さんは「あなたは心の中に入ってくるね」と言ったという。細川さんの気持ちは変わる。「私にも背負わせてください」と。

ここでも、被爆体験者を継ごうとする人が、体験の語り部が語ってこなかったことを受け取る様子が描かれる。また、この取り組みにおいて興味深いのは、従来「証言者」とか「語り部」と言われてきた人びとを継承する新しい語りの担い手を、この2012年度に広島市が開始した「被爆体験伝承者養成事業」においては、はじめて「伝承者」と制度的に名付けているという点である。ここにおいて、民俗学の用語であるはずの「伝承者」という用語が、民俗学者たちの文脈からまったく外れた極めて現代的な社会状況の中から、改めて公的な制度に組み込まれたものとして生まれてくるのだ<sup>66</sup>。

被爆地から遠く離れた東京でも語り部育成が始まっている。毎日新聞2017年8月16日の記事では、「語り部：長崎で被爆、核兵器廃絶への思い伝えたい 伝承者育成に尽力 国立で活動、桂茂之さん／東京」として、東京都国立市が、2015年に被爆者の代わりに体験を語り継ぐ人材を育てる「くにたち原爆体験伝承者育成プロジェクト」を始めることになったと伝えている。ここでは、20～70代の19人が3月に研修を終え、「伝承者」として活動し始めたという。

2015年8月7日の読売新聞夕刊「戦争体験『伝承者』育てる 語り部に学び学校へ 戦後世代 国が公募」は、とうとう国までが「伝承者」育成に動き出したと伝える。2016年4月以降に一般公募し、約3年間、定期的に研修を受けて、2019年度から小中学校などで活動を始める見込みだという。初年度は20人程度の育成を目指し、「語り部」などとして活動している人から体験を詳しく聞いたり、伝わりやすい語り口などを専門家から学んだりする見通しだと記される。実際に始まった研修事業では、「戦中・戦後の労苦を語り継ぐ戦後世代の『語り部』」と、「語り部」の呼び名が採用されたようだ<sup>67</sup>。

以上、戦争体験に関わる体験の継承が制度化されつつ進められていく様子を追ってきた。このような非体験者による継承の動きは、

66 一方長崎市では、2014年度から、「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業」と称し、2年間は被爆者の家族による被爆体験継承への支援事業を行い、2016年度からは、「交流証言者」として、家族以外の人に対しても被爆体験の継承を支援する事業を実施しているようである。長崎原爆資料館HP「募集について 被爆体験を『受け継ぐかた』と『託したいかた』を募集しています」『語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業～』。http://nagasakipeace.jp/japanese/peace/keisyo/bosyu.html(2018/03/31閲覧)。

67 厚生労働省2016「戦中・戦後の労苦を語り継ぐ戦後世代の『語り部』の育成を開始します」http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000132537.html(2018/03/30閲覧)。「語り部の育成は、昭和館、しょうけい館及び首都圏中国帰国者支援・交流センターの3施設に委託しており、各施設において、それぞれの趣旨に沿った語り部を育成します」とされ、昭和館では「戦没者遺族をはじめとする国民が体験した戦中・戦後のくらしの上での様々な労苦を継承」、しょうけい館では「戦傷病者とその家族等が戦中・戦後に体験した様々な労苦を継承」、そして、首都圏中国帰国者支援・交流センターでは「中国残留邦人等が戦中・戦後に体験した様々な労苦を継承」しているとされる。

68 「水俣病 朗読で伝承 語り部 高齢化 担い手育成へ講座」読売新聞西部版朝刊、2016年12月30日。朗読という方法での「語り部」継承の取り組みは、2009年7月26日朝日新聞「朗読劇で被爆を追体験 語り部の話から脚本、来月4日千代田で／東京都」という記事も存在する。

69 「[列島2010] 遠野語り部 1000人計画 商店主、小学生も民話や芸能継承」読売新聞、2010年6月12日。

70 ビエール・ノラ2002「序論 記憶と歴史のはざまに」『記憶の場：フランス国民意識の文化=社会史：1《対立》』谷川稔監訳、岩波書店、29頁。

戦争体験以外の分野にも広がっている。その最も代表的なものが水俣病である。水俣では朗読による語り部の継承が試みられているという<sup>68</sup>。さらに、NPO法人遠野物語研究所が、市民1000人を「語り部」にするプロジェクトを始めたという記事もあり<sup>69</sup>、過去の事件の体験者に関わらず、昔話の語り部という文脈でも、新しい語り部が組織的に養成される時代となっていることをうかがわせる。

## 4. 考察：語り部を生み出す現代社会

### 4-1. 消滅の意識が生み出す語り部

語り部は消えつつあり、このまま下手をすると消えてしまうのだろうか。確かに、新聞報道にもみられたように、自らの体験を語る〈体験の語り部〉は年々鬼籍に入っている。「語り部」を伝える新聞記事の増減からは、決して語り部そのものの人数の増減を知ることにはできない。一方、ここから明らかになったのは、今日語り部に対する社会的関心がますます高まっているということだ。前章で見てきた通り、語り部の死は次の語り部の誕生の契機にもなっていた。語り部が消えつつあるという危機感こそがまさに、現代の語り部を生み出しているのだ。

これは、数十年来問題となっている記憶に対する問題意識と重なるものである。1984年、集合的記憶をめぐる議論を活性化させる画期となった「記憶の場」というプロジェクトの立ち上げにあたって記された序文で、歴史学者ピエール・ノラは以下のように述べた。

歴史が加速している。この表現は、たんなる比喩にとどまらない。そこには重大な意味が含まれており、それを認識しなければならない。すなわち、バランスが崩れて倒れてしまうかのよう、過去はますます急速に失われ、すべてが消え去ったと感じられつつある、ということだ。かつてわれわれは、血の通った伝統のなかに、物言わぬ習慣のなかに、古来の反復のなかに、過去を生きていた。しかしいまや、ある根本的な歴史意識もたらす圧力が、われわれから過去を完全に奪い去ろうとしている。文字通りの「過去」のなかで、われわれは自我を意識するようになり、はるか昔からつづいていたことがついに終わろうとしている。このように記憶が存在しなくなりつつあるからこそ、いまこれほど記憶が問題にされるのだ<sup>70</sup>。

ノラが言う記憶とは、共同体によって統一的に保持され伝達される価値であり、ナショナルアイデンティティを保証するようなもの

ことだと思われるが、英文学・エジプト学を専攻し、文化的記憶をめぐる議論を展開したアライダ・アスマンは『想起の空間』<sup>71</sup>において、改めてノラがもはや記憶が存在しないというのは何の記憶のことを指しているのだろうか、問い直す。そして、アスマンはこの問題を「経験記憶が直面する現在の危機に関係づけることができるかもしれない。その危機とは、二十世紀最大の破局、ショーを生き残った証人たちが、世代の交代が進むにつれて徐々に死に絶えていくことだ」<sup>72</sup>と体験者の死へと結びつける。ところが、アスマンに言わせると現在この記憶は失われるどころか活性化されている。

ホロコーストという出来事は、時間の隔たりとともに色彩を失い、色褪せていくのではなく、逆説的にも、ますます身近で重大なものとなっている。(中略)われわれが今日かかわっているのは、記憶の問題の自己止揚ではなく、逆にその先鋭化なのだ。なぜなら、時代の証人たちの経験記憶が将来失われてしまうことを防ぐためには、それは後世の文化的記憶へと移し変えられなくてはならないからだ<sup>73</sup>。

かくして本書は「経験記憶」が失われた後の「文化的記憶」<sup>74</sup>の形態を論じていくのだが、おそらく問題はそれだけではない。確かに、新聞記事に取り上げられた戦争体験者たちの中には、絵本や紙芝居、映画等の中にその姿を保存しようとして人物が多かった。被爆の語り部沼田鈴子氏に至っては、漫画、伝記、映画、そして、粘土像までが作られている<sup>75</sup>。しかし、新聞記事に語られた語り部たちを思い出してみると、今日の問題は、この「経験記憶」の消滅への恐れから「文化的記憶」への移し替えが先鋭化したということだけでなく、この恐怖心がまさに新しい「経験記憶」そのものを生み出し、生み出そうとしていること、「語り部」の語った記憶はあくまで人間の経験に基づく語りによって記憶していこうとする私たちの社会の意志が、根強く存在することである。

ノラは、伝統的な記憶の消滅が意識される時代において、人びとにとって記録することは強迫観念となっており、私たちは証言、文書、痕跡などを「あたかも信仰を实践するかのよう<sup>76</sup>に収集せねばならないと感じる」のだという<sup>76</sup>。しかし、日本の新聞記事における語り部をめぐる議論を加味するならば、ここに「語ること」への信仰を付け加えるべきである<sup>77</sup>。そして、語り部に関して言えば、その名を冠せられる人びとは、今日の「語ること」に対する信仰の中で際限なく様々な領域へ広がっている。現代社会、少なくとも日本の現代社会とは、今までになく「語り部」が消えていきつつあるからこそ、「語り部」が生まれてくる社会なのである。

71 アライダ・アスマン2007『想起の空間：文化的記憶の形態と変遷』安川晴基訳、水声社。

72 アスマン、同上、26頁。

73 アスマン、同上、27-28頁。

74 ここでの「文化的記憶」は、アライダ・アスマンの夫であるヤン・アスマンの定義にしたがうと考えられる。ヤン・アスマン(1995)は、集合的記憶を「コミュニケーション的記憶」と「文化的記憶」の二つに分類して定義した。コミュニケーション的記憶とは、日々のコミュニケーションにもとづく集合的な記憶であり、80~100年、3~4世代の間でしか共有し得ない非公的な日常の記憶である。ある記憶がこれを超えて長期に渡って維持されるためには、その記憶は様々な形態をとって客体化され、構造化され、制度化されて、ある「記憶の形象」としておさまらねばならない。これが「文化的記憶」である。したがって、「文化的記憶」という時の「記憶」とは、客体化された文化に対して用いられるメタファーに過ぎない。しかし、それによってある集団のアイデンティティが保たれるかぎりにおいて、これも「記憶」と呼ぶうるのだという。このような「文化的記憶」は、私たちの日常からは距離のある存在であり、変化することのない、過去の不動の基準点を持っている。Assmann, Jan 1995 *Collective Memory and Cultural Identity*, *New German Critique*, 65: 125-133頁。

75 「ヒロシマの語り部、粘土の像で中国へ」朝日新聞、1989年11月17日、「漫画になって子どもに接近 ヒロシマの語り部 沼田鈴子さん」育児・教育朝日新聞、1995年8月4日、「今週の本棚・新刊：『被爆アオギリと生きる 語り部・沼田鈴子の伝言』=広岩近広著」毎日新聞、2013年5月5日、「映画：語り部の沼田鈴子さんモデル『アオギリにたくして』」広島で被爆の上田さんが企画、28日に

八王子で上映会／東京毎日新聞、2013年9月25日など。

76 ノラ、前掲書、39-40頁。

77 「語ること」への信仰を生む過程では、地方の名もない人びとの語りをその資料としてきた民俗学や、民俗学の周辺で語りを収集してきた様々な学問的・社会的営み、例えば、生活史研究やライフストーリー研究、民話運動などが影響しているのではないかと考えているが、この点については今後検討していきたい。

78 アライダ・アスマン2011『記憶のなかの歴史：個人的経験から公的演出へ』磯崎康太郎訳、末籟社。

#### 4-2. 「語り部になる」経験の語り

ここでやはり、冒頭に引用した屋嘉比が問うた「非体験者であるわたしたち」がいかに体験の語り部を継承できるのかという問題が立ちあがってくる。毎日新聞2017年12月1日の「記者の目」欄、「戦後生まれの『語り部』たち 脱聞き手『語り継ぐ』挑戦＝松本光樹(甲府支局)」では、2016年に厚生省が始めた語り部の育成にも触れながら「ただ、詳細で専門的な知識や言葉だけを語り継いでいっても、体験者の生の声には及ばないとも感じる。当事者の体験談がまとう『熱』は別の人間では再現できないからだ」と問うている。

ここで注目したいのは、語り部とは、〈体験の語り部〉にせよ、それを継ぐ語り部にせよ、人生のある段階で「なる」ものであること、そして、自分がいかにして語り部になったかを語り、他者によってもそれを語られる者であり、それはしばしば語り部がいかにして過去に出くわしたかを語ることに重なっているということである。アスマンは、『記憶のなかの歴史：個人的経験から公的演出へ』<sup>78</sup>において、「私たちはいかにして歴史に出くわすか」という問いを立てた。例えば、被爆2世の小林真紀氏が、被爆体験記を書こうとしても爆風に吹き飛ばされた数々の遺体の光景が浮かんで中断せざるを得なかったという高蔵信子氏に、被爆体験を生涯語ることができず、「水をあげられなかった」、「助けられなかった」とうなされた父の姿を見た時、小林氏は「歴史」とまでは言えないかもしれないが、自身の父が辿ってきた過去の人生がいかなるものであったかということに、確かに出くわしたのだと言える。そうして「父が言えなかった思いを語ろう」とした時、小林氏は「語り部になる」のである。そしてこのような、一人の人間である語り部自身がいかに過去に出くわし、いかに語り部になったかということこそが、語り部の体現する生き生きとした過去に関する語りの核心ですらあるように思われる。なぜなら語り部の役割は、過去の事実そのものを伝えること以上に、それを一人称で語る力にこそあるからである。ここで柳田國男の語り部をめぐる議論を思い出せば、語部の語りの核心は、神や霊にとり憑かれた者による一人称の力にあった。これが聞く者を感動させ、語り信じさせたのだ。「語り部になる」という経験は、常に語り部によって一人称で語られるものであり、ここに私たちが語り部に求めるものの核心があるように思われる。そして、小林氏やひめゆり学徒隊の後を継いだ仲田晃子氏、10歳で原爆孤児となった御堂義之さんの「伝承者」となった細川あや子氏のように、「語り部になる」という経験を経た〈体験の語り部〉を継ぐ人びとは、時としてまさに〈体験の語り部〉にとり憑かれた者として、〈体験の語り部〉本人には言えなかった想いまでも、語り継ぐのかもしれない。

また、本論で新聞という尖端的な事例を伝えるマスメディアにお

ける語り部の現れ方を検討したことは、現代社会における語り部の本質をつかむうえでも重要だったことを示しておきたい。「語り部になる」ことの語りは、極めて個人的なことであるがゆえに、新聞記事にもリアリティを持たせる効果があると考えられる。マスコミは「絵になる」突端的な対象を求めるものである。記事の読み手も、語り部が一人称で語る具体的な経験を通して、その記事から生き生きとしたものを感じ取ることができる。訃報記事によって初めて「語り部」と名指された人がいたことからわかる通り、語り部の誕生と死、そして語り部は、マスコミによって捉えられた社会的事実である一方、マスコミがその特に重要なアクターの一つである、語り部を求める社会の働きによってこそ生み出されるものでもあるのだ。しかし、こうして語り部たちによって語り継がれるものは、過去の出来事そのものとは必ずしも一致しないかもしれないことにも注意しておきたい。私たちは、記憶の消滅や歴史の風化への危機意識の中で、それを生き生きと語り継ぐ語り部を求めているが、その語り部に求められている役割の核心は過去そのものを語り継ぐこと以上に、一人称の語りによって過去に触れる生々しい感覚と、その過去を生き抜いてきた人の生きざまが伝えるリアルなメッセージを、聞き手に味わわせることにあるのではないだろうか。近年語り部が制度的に養成される中で、「語り部になる」という経験はいかに語られていくのか、今後の展開を見守っていく必要がある。

#### 4-3. 〈語り部現象〉の加速化

ここで、改めて冒頭で示した震災の語り部の事例を思い出してみたい。同じ月の間に語り部解散の危機と誕生のニュースが報じられていた東日本大震災の記事から、40～50年程度の時間をかけて繰り広げられてきた戦争体験の語り部をめぐる様々な現象が、震災においてはより短期間で、しかも同時期に生じていることがわかる。

実際、阪神・淡路大震災後でも、震災から1年後には神戸市の被災者らが「市民語り部キャラバン」を立ち上げたことが伝えられ<sup>79</sup>、神戸市教育委員会と神戸市国際観光協会がタイアップして語り部の制度化も早くから進んでいたことがわかる<sup>80</sup>。東日本大震災の後は展開がさらに早く、既に5月から復興イベントに集まるツアー客らに震災体験を語り始めたという地元の観光ガイドサークルが紹介される<sup>81</sup>。自宅を流され、当時を思い出すだけでもパニックになるような状態だった芳賀タエ子氏は、何度も説得され7月からツアー客の前に立っているという。辛くて語れなかった経験が語られるまでを「語り部になる」経験として伝えるという意味では、この記事は戦争体験の語り部の場合と同じである。しかし、その一連の変化に要する時間があまりにも短い。2017年2月26・27日に開かれた「第

79 「参上します『震災語り部』神戸の被災者らがキャラバン活動開始」朝日新聞朝刊、1996年1月11日。

80 「“震災語り部”が神戸市に誕生 命の貴さ、修学旅行生に切々」読売新聞大阪版朝刊、1996年4月20日。

81 「震災の『語り部』に悲劇『伝える責任』観光ボランティアがれきを前に」読売新聞、2011年10月4日。

82 「[震災6年 防災力を高める]  
(4) 語り部たち 風化との戦い(連載)」読売新聞朝刊、2017年3月11日。

83 例えば、門田・室井編、前掲書。

84 国立国会図書館の全国の図書館にある資料が検索できるシステム、「国立国会図書館サーチ」で、「伝承者」を検索すると、近年では、いわゆる民俗的なものの「伝承者」に加え、やはり広島の実験的「伝承者」に関する記事・論文も多くみられる。さらにこれだけではなく、例えば日刊工業新聞社の2018年3月の記事「誤解 熟練者(伝承者)は、積極的に技術・技能伝承を支援してくれる」には、工業界における技術の「伝承者」に関する記事があり、早稲田大学図書館報『ふみくら』77巻では、仁上幸治2008「〈インストラクター講習会開催報告〉文獻調査法の専門分野別最先端情報の共有へ向けて：研究室内知識伝承者を養成するインストラクター講習会の試み」として研究室の知識の「伝承者」という言い方がされている。さらに、嘉嶋崇志2009「安全の伝承者たち(4)全日本空輸(株)と羽田空港管制塔に見るコミュニケーションと安全」『日本鉄道施設協会誌』47巻10号では、安全の「伝承者」なるものが存在することかえ、「伝承者」という概念もまた、「語り部」と同様に現代社会の幅広い文脈へと広がりを見せていることがわかる。

85 柳田國男が監修した『民俗学辞典』の「伝承者」の項目には、「伝承者はまたいわゆる物知りとも違う。村々の生活について故事来歴を知っている物知りは、書物の上の知識をふりまわす村のインテリである場合が多い。その言うところが概ね主観的でかたよっており、生活伝承についての正確な知識を持たず、むしろそれを軽蔑していることが少なくない。伝承者はこれに反して人に問われれば答えもするが、自分からは控

二回全国被災地語り部シンポジウム」では、コーディネーターを務めた神戸大名誉教授の室崎益輝氏が、「語り部の裾野をさらに広げるべきだ」と訴え、「教訓を伝える主人公になるべきは人間だ。みんなが語らなければいけない」と述べたという<sup>82</sup>。古代以降零落したとされる語り部たちは、今日、全く別様な姿を身にまといながら復権した。しかし、「みんなが語り部にならなければいけない」という時代が未だかつてあったのだろうか。震災をめぐる語り部の誕生と風化の加速化、そして「語ること」への信仰は、今日あまりにもあわただしすぎて、語り出すのに時間を要する多くの人びとを置き去りにしていつているのではないかという危惧を抱かせられる。

## おわりに。現代の「語り部」/「伝承者」を捉えるために

民俗学では、個人に着目してこなかった従来の民俗学を反省する際に、「伝承者」という概念がやり玉に挙げられることが多い<sup>83</sup>。しかし、本論の議論を踏まえれば、むしろ今日こそ、「伝承者」は民俗学に留まらないより社会的な文脈の中で求められているということが理解される。民俗学者がフィールドで対面してきた人びとを「伝承者」と名付けたことが、そもそも「伝承者」という概念の始まりであったならば、今日新たに生まれてくる「伝承者」たちから民俗学者が目を背けることは許されまいだろう<sup>84</sup>。さらに、今日の「伝承者」は民俗学者に問われたことにだけ淡々と答えてくれる、控え目で主観的偏りのない事実のみ伝えるような人物ではなく<sup>85</sup>、自らが「伝承者」と見なされていることを自覚しながら積極的に言葉を紡いでいくような人物である。ここに、1979年に語り部論研究者たちが問うた問題が再び現れるのである。社会の中で語る彼／彼女らにはどこまで「個」による創作が許されており、どのような点で再び“群れ”なるものに埋没していくのだろうか。

公的な制度によって保証された語り部であっても、やはり現代の語り部において重視されるのは個人的な体験である。語り部とは、現代社会において“個”と“群れ”の記憶がぶつかり合い、組み替えられ、溶け合う最も尖端的なフィールドなのだ<sup>86</sup>。確かに(人)に向き合うことを掲げた近年の民俗学は、再帰的に自己を物語るごく普通の人を民俗学が対象にし得る可能性を示した。本論も伝承のみにとらわれているのではない人びとの日常をとらえるという視点を組み入れている。しかし、東日本大震災後の「語り部」の生成過程が明らかにするように、今日の日本社会は、普通に日常を過ごしている私たちがいる日突然歴史的事件の体験者である自身を自覚し、ある集団の歴史や記憶を背負って「伝承」したり「継承」したりするこ

とを自身の使命と感じるようになり、“群れ”の中のただならぬ“個人”になるという可能性がいくらでもありえる社会なのだ。「語り継ぐ」ことを自覚した現代における「伝承者」のあり方を再帰的に見つめていくこともまた、今、民俗学に求められているのではないだろうか。そして、そこからこそもう一度、語り部になり得なかった〈人〉や話を捉えていく視点を築いていく必要があるのではないだろうか。

このような研究を進めるためには、今後語り部に焦点化した民俗誌的研究が求められる<sup>87</sup>。特に、本論で取り上げた新聞のようなマスコミと個別の意志をもった語り部たちとの間には、実際には戦略的な関係も存在すると考えられる。このような徹視的な関係についても、今後民俗誌的な調査によって明らかにしていく必要がある。

日本の長い歴史の中で零落の一途をたどってきた語り部は、現代の経験記憶に対する消滅意識の中で復権してきた。それを端的に示していたのが、2000年代以降の語り部を継ぐ人びとの制度化である。国や地方自治体が行う「語り部」や「伝承者」の育成は、再び公の歴史を物語る存在として語り部が捉え返されていく過程にも思われる。この中で個々の「語り部」や「伝承者」はいかに「語り部」や「伝承者」となり過去を語り継いでいくのか。これを見極めていくことが、今日の民俗学の役割であるように思われる。

え目にしており、最初は口が重く、話し出すと次々に話の出てくる人が多い」とある。民俗学研究所1951「伝承者」『民俗学辞典』東京堂出版、389頁。

86 注25を参照。

87 金賢貞は、文化人類学者全京秀(1990)の「물상화된 문화와 문화비평의 민속지론 : 민속지의 실천을 위한 서곡(物象化した文化と文化批評の民俗誌論:民俗誌の実践のための序曲)」『현상과 인식(現象と認識)』14(3)を引用しながら、ethnographyの訳語として「民族誌」ではなく「民俗誌」の表記を用いるとする。これは、民俗学と人類学を区別しようとするためではない。金は、その理由を、「『民族』を対象にするという誤解からより自由になれるだけでなく、究極的には「人」を理解するために『文化』を『記述』するという意図を「民俗誌」のほうがよりよく表すという全の主張に同意するからである」と述べる。金賢貞2016「韓國民俗学は『当たり前』を捉えうるか: 韓國国立民俗博物館の二つの民俗誌(2007~14年)を中心に」『日常と文化』(2)、27頁。本論も、全と金の主張によりながら、「民俗誌」という表記を採用することとする。